宝の山を耕す道具

日本人の足元を見つめる

自分、世界を知る

安倍冨士男盛岡白百合学園中学校教諭

安倍冨士男盛岡白百合学園中学校教諭は盛岡を宝の山だと主張する。歴史や自然、数多くの偉人たち、生きた教材があふれる。「子供たちが全国に向けて胸張れるようなことをわたしたちはやりたいな」。それをIT教育が可能にする。

同校はキリスト教の学校としてパソコンやインターネットの活用から自分、世界を知ることを教育目標にする。

基本は人間中心。機械やハイテクに振り回されず、自己実現や社会に出て自らのため、社会貢献に必要な道具だと認識している。

平成六年からインターネットに接続できるパソコン二十四台を導入。今年は百台を整備し、三年計画で教員にパソコン一台を支給するなど、学校全体でIT教育を推進する。

「それだけのスキルをわれわれは持っていないわけだから、パソコンが入って、インターネットが接続されても活用の仕方が今一つ見いだせないと言う声がある。問題点でもあるが、教育界にこれほど予算が付くことはなくラッキーだ」。機は熟した。

高度情報化社会に必要な能力として、情報格差（デジタルデバイド）や情報リテラシー（機器を使いこなし、読み解く能力）、著作権の理解を達成することが文部省の目的だ。政財界や産業界の要請による国際競争力を持った人材育成、景気対策という裏の顔を合わせ持っている。

IT教育は「目に分かるような項目、実行可能な数値目標、実現目標を掲げる必要がある。地方が独自に解釈して『うちのまちに住む子供にはこういうことをさせ、ほかの子供とはここが違う』と言えるよう、責任を持って遂行するべきだ」と言う。地方教育行政の力が問われている。

教育行政や現場が成熟し、目指すIT教育は何か。何ができるのか。安倍教授は「自分を知る」ことだと強調する。

やりとりする時間を短縮させるインターネットはITの有用性を気付かせる。

「アメリカの子供とメールでやりとりさせ、相手から『あなたは日本人だから、わたしにお茶、生け花、日本文化の能や狂言について教えてください』と聞かれる。生徒はさっぱり分からない。外国人の目を通じて自分たちが日本人なんだと認識する。そこから自分の足元（日本）をみつめる勉強を始める」

生徒は外国の子供とのメールの交換で何をやりたいのか、自分が知らないことについて勉強しようと考える。ITは「気付き」の道具だ。

世界性や気付きはITでなければ学ぶことができないのか。

「導入当時、インターネットは限られた数の学校だけで行われていた。あくまで電話やファクスのような通信手段を学校で教える必要があるか確かに悩んだ」

しかし「メディアの情報は発信者の意図の基に流れている。今までは数が限られていた。ネット社会の情報は膨大で不必要な情報の方がはるかに多い。それを生徒がしっかり見分ける能力は、これからを生きる生徒には絶対に必要になる」

「必要ないと思えば使わなくても十分やっていけるが、自分の力になる道具を知らないままではまずいのではないか」と話す。

インターネットを使った面白い授業を各校がスタートさせている。

すべての学校の財産として担当者が一人で頑張らず、情報交換や学校の枠を超えた支援が学校に求められる。

「こうなれば、教育は面白くなる」と確信する。

安倍さん

安倍冨士男盛岡白百合学園中学校教諭。高校の英語科教師ながら平成6年に同校情報企画室長に。市内公立中学校で社会人講師として情報教育を支援。岩手大学非常勤講師。38歳。

験をさせたいという。一ている。

「さは分からない」と失一自分たちの活動を補助一やりとりに注目していい言前にたる

既に9校が